

第二編  
神話の里

## 第一章 霧島山の名称

霧島山を指し示す名称として、古来、伝説神話などに書き表されたものはいろいろある。例えば、霧島・高千穂峯・曾峯・櫛触峯・久志布流峯・二上峯など。この中では、霧島の名称が多くみられる。しかし、今では霧島というのは、山群全体に冠せられた名称であり、高千穂というのは、その中の一高峰に限定されている。

「三国名勝図会」の記事に「一此ノ岳、本名ハ高千穂トイエドモ、従来霧島山ヲ以ッテ通称トナス」とあるのはじめ、『日向風土記』には、次の記述がみられる。

一、天孫降臨ノ時、霧深クシテ物色ヲ弁ゼズ。稲穂ヲ投散シ給イシニ因ッテ、雲晴レシ事、上文ニモ記セシガ如クニテ、此峯ハ特ニ朝夕霧常ニ深キ処ナリ。此処ニ至ッテ然リトス。故ニ霧島ト名ヅクトイエリ。

二、一説ニ皇孫天降ノ時、雲海ヲ見下シ給ウニ島ノ如ク見ユルモノアルヲ、天瓊ヲ以ッテカキ探リ、其処ニ天降リアリ、其ヲ逆ヲニ立給ウ。是ヲ逆ヲト号ス。今ニモ雲

霧都城ノ曠野ヨリ高千穂峯ノ山腰ヲ擁スル時ハ、其ノ中ニ一峯顕ハレ出デ漂見島ノ如シ。故ニ古ヨリ都城ノ地ヲ霧海ト言イ、又、其ノ地ヲ虚海トモ言ウ。霧島ノ名ハ是ヨリ出タリトス。

三、一説ニ天孫稲穂ヲ撒ジ給イシニ、雲霧開キ晴レシヨリ霧島ノ名起ルト言エル説アレドモ、霧島ノ名ハ、其以前ヨリノ名ニテ、瑞穂の縁ニシヨリ高千穂峯ノ名ヲ得シニテ、今猶霧島ト言ウ名ニ呼ビ来タルハ却ッテ其旧称ニヤヨリタラント言エリ。

四、一説ニ霧島ノ字、蓋シ統後紀承和四年（八三七）ヨリ始マル。曰ク、霧島峯ノ神、官社ヲ預カル。是ナリ。先是、古書ノ内所見アルヲ見ズ。統紀延暦七年（七八八）火ヲ曾ノ峯ニ発ス。承和四年（八三七）ニ至ッテ実ニ五十年ナレバ、其ノ霧島ト名ヅクル此ノ間ニアルベシ。近ク此秋桜島火ヲ安永八年（一七七九）ニ発ス。爾後今ニ至ッテ五十年、猶煙霧ヲ帶ブ。是ヲ推シテ見レバ、此峯霧ヲ以ッテ奇を示スガ如シ。因ッテ其ノ名ヲ得タルナラン。但シ島ノ字ヲ配スルハ、イワユル、漂落ニ本ヅクナルベシトイエ

リ。

上文ニ記セル諸説アリトイエドモ、蓋シ、第一説ノ如ク此ノ峯霧深キ縁故ニテ名ヅケタルナラン。島ノ字ハ上古此ノ岳ノ下周囲水沢ナリシ故ニ因ツテ名ヲ得タルナルベシ。云々

霧島ノ名称ハ上文ノ諸説ヲ考ウルニ、高千穂ト霧島トハ古来皆縁故ニ因ツテ兩名伝ワルヲ、此ノ峯常ニ霧深キ処ナレバ、現ニ朝夕見ル景状ヲ呼ビ習イ、霧島ト唱エ、其ノ呼称盛ニナリテ世ニ行ワレ、高千穂ノ名ハ次第ニ隠レツルナラン。云々

また『古事記』には、「天ノ八重多那雲ヲ押シ分ケテ、イツノチワキチワキテ、天浮橋ニ浮キジマリ、タリタタシテ高千穂峯ニ天降リマシキ」と、高千穂峯の名が現れ、『日本書紀』には、「……高千穂峯ニ天降リマス。既ニシテ皇孫ノ遊行ス状ハ即チ、久志日二上天浮橋ヨリ、浮渚在平処ニ立タシテ」とある。このほか同書には、霧島のことか幾通りにも記されているが、日向襲之高千穂<sup>くしく</sup>日二上峯とずいぶん長たらしい名も出てくる。日向の襲地方の高千穂と名づけられた霊山で、二つそびえた山といった調子の呼び方であろう。穂日は霊に通ずる。高千穂二上峯の呼び名について、『日向風土記』は

次のように記す。

天津彦火瓊杵尊、日向ノ高千穂二上峯ニ天降リマシシ時、天暗冥クシテ昼夜別カズ。人物道ヲ失イ、物ノ色別カチ難カリキ。茲ニ土蜘蛛アリ。名ヲ大鉗、小鉗トイウ。二人奏シケラク、「皇孫尊、尊キ御手以ツテ、稲千穂を抜キテ、粃トシテ四方ニ投ゲ散ジ給ワバ、必ズ開明リナム」ト申シキ。時ニ大鉗等ガ奏セルガ如ク、千穂ノ稲ヲ搦ミテ粃トシテ投ゲ散ラン給ワバ、即チ天開明リテ日月照レリ。因ツテ高千穂二上峯ト日ウ。云々

このほかにもいろいろあるようだが、だいたい上記と同じようなものであろう。このようにみてくると、その真偽は別として、わが霧島は、その名称からしても古い伝説の上に立っているといえよう。

## 第二章 神話「天孫降臨」

神々の世界に起こったいろいろな物語を神話という。

神話や伝説は、大昔から次々に語り伝えられたもので、その間には、話が誇張されたり、都合の悪いところは除かれたり、後世わざとよけいな話をつけ加えたりして、永い年数の間には、ずいぶんと変わったものになってしまいうことも多い。だから、神話や伝説をほんとうの出来事だとまるまる信じこんだら大変なことになる。神話は歴史ではない。歴史は地上に住む人間同士の間に起こった事実を記したものであるが、神話は人間とは別の世界の神々の間に起こった出来事を記したものである。もちろん見た者もないわけで、人間が考えてつくった話である。

人間は自分の知識でわからないところがあると、人間よりすぐれた力をもつ神というものを考えたして、その神々の力にしてしまう。原始時代の人々は、現代人の

ように知識が発達しておらず、自然界の出来事や現象もすべて神の仕業にしてしまったのである。その中でも特に、人間が生きていくのに最も恩恵を受けている太陽をあがめ尊んだ。その太陽の神、すなわち日の神天照大神は、人間神として最もすぐれ、創造神として、多くの神々を創り出す力をもっていたので、神々の中でも特別に高い地位で、すべての神々をまとめていた。大昔の人々は、この神々に人間らしい性質を持たせることによって、天照大神には子孫があり、その性質を受け継いでいくと考えたのである。

このような神話は、日本だけでなく、世界いたるところにあり、共通した点も多い。しかし、日本神話は日本民族が創りあげたものである。大昔は文字がなかったから、文章で伝えることはできずに、神話はすべて口により伝えられてきた。ひとつのまとまった物語ができたの

は、学問が進み文化が開けてからのことである。現在伝わっているものは、八世紀初めにつくられた『古事記』と『日本書紀』に記されたものが大部分である。

神話は歴史とは全く無関係かというと、必ずしもそうとはばかりはいきれない。文字のなかった大昔のことを知りたいと思えば、遺跡を発掘して土器や石器を手がかりにするか、あるいは、神話や伝説をよりどころにしないでならぬ。神話や伝説の中にも大昔のようすを、ほのかに示してくれるものもある。これを手がかりにして大昔のことを考えることも、歴史の研究のうえで大切なことがある。また、神話や伝説は、大昔から語り伝えられ親しまれてきて、国民の生命に深くしみとおっていることも事実である。神話を歴史そのものと信じこむことは間違いだか、すべてがうそだときめこむのも問題であろう。神話を正しく読みとるという考え方をはっきりさせて、霧島に関係のある神話を記してみよう。

## 第一節 日本神話のすじ道

霧島と最も関係の深い神話は、もちろん天孫降臨の神話である。しかし、この部分だけ独立している神話でなく、その前後がわからなくては味わいも少ない。天孫降臨は日本神話の中心でもある。これよりさきの多くの物語は天孫降臨の場面をつくる働きをもつということができるし、これより後の場面は、天孫降臨のうちから生じたということができよう。文学博士中村孝也著『原始社会』によると、日本神話を次のような五段の順序に分けている。天孫降臨の話を進めるためにこの書から引用して解説してみよう。



第一段は開闢神話である。開闢とは、天地闢といっ

が、やがて二つに分かれて神々ができ、世界ができたことをいう。伊弉諾尊・伊弉冊尊の国生みの物語、両神の

争いの場面になる黄泉国の物語、黄泉国から逃げ帰った伊弉冊尊が筑紫の櫛原で禊ぎをされる物語がこれに属する。禊ぎ祓いで、清浄な身となった尊から、天照大神

(太陽神)・月読尊(月の神)・素戔嗚尊(暴風雨神)が生まれ、これよりさきの神話は、天照大神と素戔嗚尊およびこの両神の子孫を中心として展開していく。

第二段は高天原神話で舞台は高天原である。高天原を治めていた天照大神を訪ね、心の正しさを誓った「うけひ」の物語。この時、大神の玉から生まれた最初の神が天忍穗耳尊あめのおしほみみことといい、その御子みこが天孫瓊々杵尊にぎはみことである。さて、そのまま高天原にとどまった素戔嗚尊の乱暴さを怒

って、天の岩屋にお隠れになった天照大神を再び外に連れ出す天岩戸の物語、これなどは自然神話とみるならば、太陽と暴風雨の争いといえよう。農業民族が台風をおそれる心と、それに負けない太陽をあがめる心がふかくひそんでいる。また、天岩戸事件で、神々の裁判を受け、高天原を追放された素戔嗚尊と食べ物をつかさどる神、大宜都姫との出会い、これを殺したところ、からだ

からいろいろの農産物が出てきたという「神やらい」の物語がこれに属する。

第三段は出雲神話である。舞台は出雲である。よく知られている八岐の大蛇退治の物語。この時、大蛇のからだから出た剣を天叢雲剣と名づけ、のちの天照大神にたてまつり三種の神器の一つになったことは、よく知られている。素戔嗚尊はここで農業神、奇稲田姫と結婚する。その子が大国主命である。ここでは「因幡の白兔」の物語がある。さらに高天原の天照大神と出雲の神々との間に行われた「国ゆずり」の物語もある。

第四段が天孫降臨の神話である。

第五段は日向神話で舞台は日向である。日向の高千穂峯に降臨した瓊々杵尊とその子孫に関する神話で、最も有名なのは「山幸海幸」の物語である。兄の釣り針を魚にとられて取りかえしに行く山幸・海神の御殿わだつみの宮での豊玉姫との出会い、釣り針をみつけて日向に帰る。塩盈珠と塩乾珠の霊妙な力で兄を滅ぼしてこの国のあるじになる。豊玉姫のお産をみたばかりに、豊玉姫はわだつみ宮へ帰って行く。このような場面から構成されている。この山幸が彦火々出見尊である。その子が彦彦

限建鵜草葺不合尊である。このような日本神話の流れを受けて、さらに神武天皇東征、即位へと移っていくのである。

## 一 天孫降臨

天照大神の命を受けて出雲へ行き、国ゆずりの交渉を成功させた経津主命と武甕槌命とは、やがて高天原にかえって大国主命が国をさしあげたことを報告した。天照大神はたいそうお喜びなされ、はじめお考えになっていたとおり、天忍穗耳尊をこの国にお降しになろうとなさったところ、尊は次のように申された。「私が降るつもりでしたが、御子が生まれました。天日高彦火瓊杵尊と申します。この御子を降したく存じます」と。そこで、天照大神は天孫瓊々杵尊をお呼びになり、おごそかに申された。「豊葦原五百秋の瑞穂国は、これわが子孫の王たるべき地なり。よろしく爾皇孫ゆきて治めよ。さきくませ、宝祚の隆えまさんこと、天壤と窮り無かるべし」。この意味は、日本の国は、自分の子孫が君主となって治める国である。だから皇孫瓊々杵尊よ、行って

この国を治めなさい。ごきげんよう。その御位は天地とおなじくいつまでも栄えるであらう——となる。

それから、八咫鏡と天叢雲剣と八坂瓊曲玉の三種の神器をさづけ、とくに八咫鏡を手にとりて、「この鏡を見ること、なおわれを見ることくすべし。床を同じくし、殿を共にして、以て斎鏡とすべし」とおせられた。

この鏡を御神体として、天照大神をお祭りしてあるのが伊勢の皇大神宮である。瓊々杵尊はつつしんで天照大神のことはうけたまわり、三種の神器を大切にささげ持つて、静かに大神の前をひきさがった。大空一面に光があふれ、涼しい風が吹いている。尊は幾重にもたなびいている雲をおしわけ、おしわけして、天浮橋に立たれた。その後には天児屋根命・太玉命・天鈿女命・石凝姥命・玉祖命がお供をしている。これをまとめて五部神という。

また、天忍日命・天津久米命の二人の勇ましい神が大きい剣を下げ、強い弓矢をせおって、先払いをして進んだ。その大ぜいの神々もお供をして、静かに降って行く。それは誠に神秘的で荘厳な光景であった。この行列が、天の八岐という道がいくつにも分かれている所にさ

しかかった時に、身の丈が高く、骨のたくましい大きな神が、上は高天原を、下は中国<sup>なかつくに</sup>まできらきらと照らしていた。瓊々杵命は、「何者であるか、たずねてまいれ」と天鈿女命をおつかわしになった。命は「お道すじに立ちほだかるお前は何者じや。どうしてじやまをしているのか」と問いたですと、「わたしは猿田彦命と申すものでございます。お道すじをご案内のために、ここまでお迎えに参りました」と答えた。そこで、「さようであつたか。それは大儀であつた」と天鈿女尊はそのことを申し上げると、瓊々杵尊は猿田彦命をおほめになって、道案内を申しつけられた。猿田彦命は大喜び、晴れやかにお行列の先に立って案内をした。途中何ごともなく、日向の高千穂峯にお降りになった。

これが、いわゆる天孫降臨であり、高千穂峯のふもとにある霧島神宮は、瓊々杵尊をお祭りしてある。また、伝説に、行列が高千穂峯にさしかかった時、霧が深く道がわからなかったため稲穂を投げまかれると霧がすっかり晴れわたった—という話もこれに関係する。瓊々杵尊のお墓は川内の可愛山陵である。なお、『古事記』によると、瓊々杵尊の名は、「天にぎし国にぎし天津日高日

子<sup>は</sup>番のにぎの尊」といっており、稲の豊作を中心として天上天下の調和を祝福する意がこめられているということである。

## 二 天孫降臨以後

日本神話の解釈には、いろいろと説があつて、日本民族の起源の研究のうえでも種々論じられているので、そこまで考えていくとずいぶん面白いのであるが、ばく大な紙数になるので、ここでは、『古事記』『日本書紀』または、土地の伝説などの、あらずじをたどることにする。

瓊々杵尊は、都を定める土地を求めて、平野が広く、五穀がよく実り、海岸に近い吾田<sup>かきさ</sup>の笠狭<sup>かささ</sup>においてになる。そして、土地の豪族、大山津見神の女、木花咲耶姫<sup>このはなさくやひめ</sup>をめぐり、火照命<sup>はでりのみこと</sup>・火須勢理命<sup>ほすせりのみこと</sup>・火遠理命<sup>ほおりのみこと</sup>の三神が生まれる。

次によく知られている「海幸・山幸」の物語である。『古事記』によると、木花咲耶姫は燃えさかる火の中で、三人の神を産んだ。火照命は海幸彦といい、火遠理<sup>ほおりのみこと</sup>



命は山幸彦といった。ある日、弟の山幸は海彦と弓矢と釣竿を交換して、海に行き、兄の大事な釣り針を魚にとられ、兄の怒りにふれる。山幸彦が困っていると、塩椎神が現れ、綿津見の神の宮へ案内する。命はその宮で、綿津見神の女、豊玉姫とねんごろになる。やがて釣り針がみつかり、故郷に帰ることになる。その時に海神は、塩の満ち干を自由にする塩盈珠・塩乾珠をさずけた。

故郷へ帰った山幸彦は、なお兄の怒りがとけないので、二つ珠を使って海幸をさんさん苦しめたので海幸はとうとう降参した。その子孫は隼人と呼ばれ、後々まで朝廷に仕えて、祖先火照命が水におぼれた時の様子をかたどった踊りを、踊ることになっていたという（『日本書紀』では、海幸は火須勢理命となっている）。山幸彦、すなわち火遠理命が日子穗穗手見命（彦火々出見尊）である。豊玉姫は綿津見宮より尊のところへ参り、山幸の子を産む。この時「わに」の姿で産むのを山幸にみられたのを恥じて姫は海へ帰って行く。こうして生まれたのが、天津日高子波限建鵜草葺不合尊である。

鵜草葺不合尊は母に別れてしまったため、鮎をつくり乳のかわりにして育てられたという。葺不合尊をお祭り

してある鵜戸神宮では、土産品として乳鮎を名物にしている。彦火々出見尊は、高千穂宮（今の鹿児島神宮のあるところ）に住み、鵜草葺不合尊は玉依姫を妻とし、神倭伊波礼彦尊（神武天皇）を産む。こうして神武天皇の東征の物語へつながっていくのである。神武天皇生誕の地は、土地の伝説によると、霧島の方もと、宮崎県高原の狭野神社の近くで、皇子原という地名が残っている。で、この地ではないかといわれている。参考までに、彦火々出見尊は、隼人町宮内の鹿児島神宮にお祭りしており、お墓は溝辺町の高屋山陵である。また、鵜草葺不合尊は、宮崎県の鵜戸神宮にお祭りされ、お墓は肝付の吾平山陵である。

日本神話は、皇室を中心とした大和朝廷、いわゆる支配者によって創られたものといえるが、また、古代の宗教や儀礼を基礎として考えられ、それが農耕文化と密接な関係をもっている。原始社会の人々が求めたものや、日本民族の姿を見つめる資料ともなるであろう。人類学や考古学と併せて、神話を正しく解釈していくことが大切ではなからうか。

## 第三章 霧島神宮および諸神社

天孫降臨の舞台であった霧島を中心とした地域には、神話に関係のある神々を祭った神社が多い。この中で、特に霧島山中に、古くから「霧島山六社権現」として崇

敬された神社が六つある。次の表でわかるように、どの神社にも共通していることは、神話による天孫降臨から神武天皇までの皇祖を祭っていることである。

名 称	旧 称	所 在	祭 神	別 当 寺	開 山
霧島神宮	西御在所霧島六社権現	始良郡霧島町田口	瓊々杵尊 木花咲耶姫尊 彦火々出見尊 尊 鵜草葺不合尊 玉依姫尊 神武天皇 豊玉姫	真言宗 華林寺	慶胤上人
夷守神社	夷守六社権現	宮崎県小林市	瓊々杵尊 木花咲耶姫尊 彦火々出見尊 尊 鵜草葺不合尊 玉依姫尊 豊玉姫	宝光院	性空上人
霧島峯神社	霧島山中央六社権現	宮崎県小林市	瓊々杵尊 木花咲耶姫尊 彦火々出見尊 尊 鵜草葺不合尊 玉依姫尊 豊玉姫	天台宗 瀬戸尾寺	性空上人
霧島東神社	東御在所六社権現	宮崎県西諸郡郡高	伊弉諾尊 伊弉冊尊 天照大神 天忍穗耳尊 瓊々杵尊	真言宗 錫丈院	性空上人
狭野神社	狭野大権現	宮崎県西諸郡郡高	瓊々杵尊 木花咲耶姫尊 彦火々出見尊 尊 鵜草葺不合尊 玉依姫尊 神武天皇 豊玉姫	天台宗 神徳院	慶胤上人
東霧島神社	東霧島権現	宮崎県西諸郡郡高	伊弉諾尊 瓊々杵尊 彦火々出見尊 尊 木花咲耶姫尊 豊玉姫 玉依姫尊	真言宗 勅詔院	性空上人

別当寺は、それぞれ、昔は非常にさかんなものであったらしいが、維新当時の廃仏毀釈きしやくによって、すべて廃毀はいきされてしまった。六社のうちにも地の利によって盛んな社と、そうでないものがある。なお、一説によると白鳥神社を六社権現の中に入れて数える場合もあるという。

## 第一節 霧島神宮

### 一 祭 神

天鏡石国鏡石天津日高彦火瓊々杵尊（あめにぎし・くににぎし・あまつひだか・ひこほのくににぎのみこと）

相殿に、嫡后木花咲耶姫尊・御子彦火々出見尊・嫡后豊玉姫尊・御孫鵜鷯草葺不合尊・嫡后玉依姫尊・御曾孫、磐余彦命いわれひこのみことを配祀してある。

### 二 沿革

人皇第二九代欽明天皇きんめいの御代みよ（約一四五〇年前）慶胤けいいんという僧が、高千穂峯と火常峯（現御鉢）との中間、背門丘せもん（現鹿児島県霧島町と宮崎県高原町との境界地付近）に、社殿を造ったのが初めてであるといわれる。ところが、第五〇代桓武天皇の延暦七年えんりやく（七八八）七月、霧島山噴火のため焼けて、永い間そのままになっていたが、

第六一代朱雀天皇<sup>すざく</sup>の天慶三年<sup>てんけい</sup>（九四〇）、性空<sup>しやうくう</sup>という僧が霧島山に登り、矛峯の西ふもと、瀬多尾越（現古宮跡）に、社殿および別当寺華林寺を再興した。一説には第六



西御在所社頭図（「三国名勝図会」から）

二代村上天皇<sup>てんりやく</sup>の天曆年間との説もある。

性空上人より二一代住持、道恵に至るまで、天台宗の寺として存続したが、第八七代四条天皇<sup>しじう</sup>の文暦元年<sup>ぶんりやく</sup>（一二三四）、噴火にあい、社殿、別当寺など全部焼失した。その後、約二五〇年間は、神社・寺院共に建造されずに、仮宮を峯の西南二里の田口半田（現在待世）に建てて祭った。現在霧島中学校の敷地隣に仮宮の跡がある。（旧待世神社）

この仮宮時代は、北条氏が政權を握っていた鎌倉時代から南北朝時代を経て、室町幕府の半ばから戦国時代初期にかかる時代である。この間、文永<sup>ぶんえい</sup>・弘安<sup>こうあん</sup>の役（元寇）があり、南北朝の争乱、応仁<sup>おうにん</sup>の乱と、対内外とも多難な歲月であった。鎌倉幕府滅亡（一一三三）後も、室町幕府の威令は行われず、わが薩隅の地も、国内統一はみられなかったために南朝方と北朝方に分かれて戦い、また、争乱に乗じて、豪族たちの勢力争いが絶えず、麻の如くに乱れていた時代であった。霧島付近でも、支配者税所氏が橋木城（重久）にこもり、さかんに島津氏と戦っていたのである。このような背景では神宮の再建も困難であつたろうことがうなずける。

第一〇三代後土御門天皇<sup>ごとうみかど</sup>の文明十六年<sup>ぶんめい</sup>（一四八四）、島

津一代の国主忠昌は、真言宗の僧、兼慶（墓は神宮付近山下坊跡にある吉松氏の屋敷後方）に命じ、現在の地に社殿および別当寺華林寺を再建させた。文明十六年は応仁の乱が始まって一七年、戦国初期にかかるころである。霧島付近では、襲郡城主税所氏が島津氏と戦って敗れ、城を失って、再起することができなかった。島津氏は薩隅統一の望みを持ち、襲郡城を占領、霧島付近を領有した直後、神宮造宮に着手したものと思われる。

その後第一一三代東山天皇の宝永二年（一七〇五）十二月、華林寺から火を発し、またまた社殿その他が焼けてしまった。そして、第一一四代中御門天皇の正徳五年（一七一五）、二二代藩主島津吉貴が社殿および別当寺華林寺を建立寄進、壮麗旧に復したのが現在の社殿である。「神祇全書」には、右のことを「当山開基の事」として次のように記されている。

人皇第二九代欽明天皇の御宇・慶嵐なる者あり。この山を開基して神殿を建立す。其の後神火洪発して山ごとく焼亡す。然る後、幾寒煥を歴たり矣。此処に性空上人當山に登り、而して神殿及び僧房を再興す。時に村上天皇の天慶三年なり（注 天慶三年は朱雀天皇である）故に性空

を以て開山となし、慶嵐の名を呼ばず。性空より道恵まで台家二十一代云々……。

文暦元年十二月、神火あり。神殿寺家皆、丙丁之災に合う。退転すること二百六十年、文明十六年に至り、真言密宗の徒兼慶（柏原備前守橘公資の三男）大守忠昌の命を蒙りて中興す。宝永二年酉十二月十五日、本社末社堂寺家、残らず焼亡す。正徳五年末、吉貴公御再興。神領高五百四十四石九斗七合余。内七十石余、坊舎並に社司其の他の役高、右慶長二十年三月十一日義久公御寄附。

右によると、霧島度々の噴火がそのつど、この神社を鳥有に帰したが、国守島津氏あつくこれを崇敬して、社殿造営その他に力を注いだことがわかる。また、天正六年戊寅十一月四日付けの島津義久公願文に、「今度、大友衆高城境着陣、難儀至極なり。よって神慮の加護を以て、此一戦勝利致すに於ては、高城一所之の事、霧島御領と為し、稲物必ず奉納すべきものなり」とあるのを見ても、島津氏の崇敬の程がわかる。明治七年（一八七四）二月十五日、宮号宣下があり、官幣大社霧島神宮となった。皇室ご一家の崇敬あつく、ご参拝も多い。

御列格及び神宮号宣下（写し）

霧島神宮

大隅国嚙郡鎮 延喜式内  
日向諸県郡 霧島神社

右之通社号改定官幣大社に被列候事

明治七年二月十五日

太政大臣 三条実美

## 税 所 氏

平安時代、一条天皇の治安元年（一〇二二

一）三月、藤原篤如、正八幡宮並びに霧

島宮司職に補任され、大隅国に下着、代々襲郡を領して霧島神領の租税をつかさどっていた。文明十五年（一四八三）に島津氏と戦って敗れ、領地は島津氏の所有になる。現在神宮本殿横に税所神社が建てられ、藤原篤如を祭っている（第三編第二章第二節参照）。

## 別 当 寺

霧島神宮は、もと、西御在所霧島権現社

## 華 林 寺

と称し別当寺を霧島山錫丈院華林寺とい

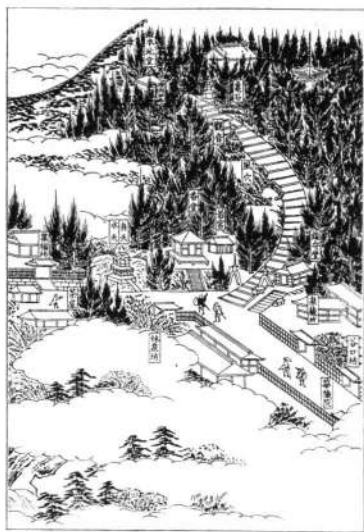
った。初め、慶胤によって背門丘に開山された。中興開山は性空上人（瀬多尾越・現在の高千穂河原）で、その後二八〇年間（二一代）天台宗が継承した。僧兼慶以後は、真言宗となり以来三八〇年余にわたって廟務をつかさどってきた。

慶応二年（一八六六）九月の神仏混淆禁止令および明治元年（一八六八）神仏分離令が出され、薩摩藩においては、廃仏毀釈を徹底して実施し、神社と寺院を同時に

祭ることを禁止したので、廃寺となった。寺領は人手にわたり、寺院の跡は畑となって今では一本の木標が華林寺の跡を示している。このように霧島神宮は僧侶の手により創建維持されてきたのである。

昭和三年（一九二八）参宮道開設着工を前にして、性空・兼慶の墓所が偶然に発見され、供養の式が執り行われた。往時は多くの寺院が建立され、三十六坊（一説には八百八坊）とも伝えられ、寺領五四〇石、深山水清く天然の淨地で、霊場として西海第一の名高い寺院であったが廃仏毀釈によってすべて廃滅した。付近にあったと伝えられる建物は次のとおりである。

- ① 本地堂 神社から約一〇〇ほど西にあって本尊十一面観音一体（木像、兼慶作）夾侍二十八部を安置
- ② 十一面観音堂 神社のすぐ南にあって、本地十一面観音の画像を安置してあった。真如親王の筆になるもので当山第一の霊像と尊ばれた宝物であったという。
- ③ 鎮守堂 神社の西約二〇〇ほどのところにあり、当山の鎮守であった。両部大日如来を本尊とした。
- ④ 多宝塔 神社の南約四〇〇ほど、本尊五智如来、慶長十九年松齡公立願創建と伝えられた。



霧島神宮別当寺錫文院華林寺（「三国名勝図会」から）

⑤香堂 神社の西約二〇〇<sup>1</sup>、本尊十一面観音を安置し、曼荼羅堂といい昼夜絶えまなく不断香をたく御堂であったという。

⑥護摩堂 神社のすぐ南にあった。本尊は十一面観音で毎年秋彼岸より冬十月初亥の日まで、華林寺の住持が寓居して、十一面観音護摩供を毎日一座あて修したところだという。

⑦不動明王石像 神社のすぐ南にあった。矛峯神社の代わりとして建立されたものと伝えられる。

⑧持仏堂 不動明王、愛染明王を安置してあった。

⑨仁王門 華林寺から南西約二〇〇<sup>1</sup>のところにあった祈安全金剛力士が安置されていた。

⑩支院六坊 本尊はすべて十一面観音であった。

本地院山下坊 本寺の南南東にあった。

知足院集福坊 山下坊の隣にあった。

宝泉院林泉坊 本寺の南南西に約一〇〇<sup>1</sup>余、御手洗

川の岸辺にあった。

正福院泉蔵坊 本寺の南南西に一五〇<sup>1</sup>のところにあった。

谷口坊 泉蔵坊の左隣にあり、本寺の退隠場所

であった。

延命院華蔵坊 谷口坊の南側にあった。

性空上人

霧島のすべての縁起に關係の深い性空上人の伝記と称されるものを紹介すると、「元享積書」——「三国名勝図会」所載には次のように記されている。

釈性空は平安京の橘善根の子なり。母は源氏。諸兄皆産難し。空をはらむ時、母は毒薬を食し胎を壊たんと欲す。而して、生まるるにおよびほとんどおぼえず。胎を出す時、右手を握り開かず。父母強いてこれを開く。一枚の針あり。生まれて三日、忽ち所在を失う。父母憂いて求むれば、庭の花むらの中にありて安座す。幼より老に至り微笑の姿あり。絶えて龜言せず。年三十六歳にして出家。人跡至らず鳴音聞かざるの深山を訪ね、乃ち日州霧島に往き、いおりを結んで居り、或は数日を隔てて食い、或は食せずして旬を歴たり。……居る事四歳、筑州背振山に移住す。

性空上人の墓所は、幡州書写山にあるという。なお、『鹿児島県史概説 古代地方史年表』に「朱雀天皇、天慶三年（九四〇）性空上人、霧島六所社を再興すと伝う。天慶八年（九四五）是歳性空上人、霧島山にて苦行す」とある。供養塔については『文化財』参照。

霧島神宮御昇格請願

このことについて昭和三年春から研究を重ね、第一回は、能勢

宮司と川畑虎熊氏との会見、第二回目は、米増竜吉・後藤祢宜・塩川東襲山村長・松下武人・川畑虎熊・能勢宮司・新穂彦熊の諸氏が神宮で原稿を起草、その後塩川村長・吉松武志・能勢宮司の諸氏が幾度か鹿児島市に貴族院議員を訪問し懇談を続け、十二月十日には、福永貴族院議員が請願書を持参上京、同十五日に玉利貴族院議員も上京、帝国議會へ提出されて請願委員の手に採択された。

請願文の全文は次のとおりである。

国祖崇敬に関する請願

恭しく惟みるに、天孫瓊々杵尊の御神格は、我国史上、天祖天照大神に次ぎて、最尊最高に在せられ、当然国祖として崇敬至誠を捧ぐべきは勿論にして、建国の本源を明らかにして人心を正しうするは内外の現状に鑑み、国家重要な喫緊事と信ず。

仰ぎ希くは、瓊々杵尊を奉斎せる霧島神宮を伊勢神宮に準ずる御礼遇に進み奉られんことを謹みて請願す。

昭和三年十一月一日

請願人

記名（捺印）



## 三 境 内

古くは、霧島山一円はことごとく、神宮の境内に属していたが、明治四年の廃藩置県後、霧島山の頂上一帯を、鹿児島、宮崎県境と定めた時、宮崎県に属する地域は境内外となり、さらに明治十五年（一八八二）一月、境内地のうち約七八一〇畝（七八〇九町六畝一步）を境外地として官有林に編入された。しかし、敗戦後の昭和二年（一九四六）憲法改正により、霧島神宮は宗教法人となったので、保管林は国へ返還されることになったが、その後神域の尊厳保持と、神宮の祭典行事を行うため必要であるとして、約七八九畝の山林が境内地として譲与された。

現在、その境内地の総面積は、八九五・六一六一畝で、その内訳は次のようになっている。

旧境内地	八七・二七三六畝
元保管林	七八九・三九三〇畝
譲与地	八・一二〇四畝
私下げ地	一〇・八二九一畝
その他	

## 四 社殿等建造物

前述のとおり、昔は別当寺がおかれ、多くの寺領をもち隆盛を極めていたが、慶応二年（一八六六）廃仏の折、寺院関係の建物は全部破壊された。社殿は入母屋式に似ているが完全でなく、当地では霧島造りと呼んでいた。唐破風で、琉球・中国の影響を受けた朱塗りの建物である。本殿の柱には、昇竜、白象の彫刻が浮き彫りにされ、壁には、中国の二十四孝図、天井には種々の植物の絵が、色鮮やかに描かれているが、作者は不明である。

建築は神社風であるが、装飾などは神仏混淆で、仏教色が強く現れている。建築材は、杉・松・檜などが使われ、社殿の屋根は木製の薄板でふいてあったが、いたみはげしく、薄銅板によるふきかえ工事をはじめ、本殿の修復工事が行われた。平成元年五月十九日に、霧島神宮の三棟（本殿・幣殿・拝殿・登り廊下・勅使殿）は国の重要文化財に指定されている。建物の面積は次のとおりである。

本殿	約一四九平方呎(約四五坪)
幣殿	約三四・三七平方呎(約一〇坪)
拝殿	約一三一・三平方呎(約三九・七坪)
勅使殿	約二四平方呎(約七坪)
登り廊下	六一・九九平方呎 一八・〇坪
渡り廊下	三六・六 一一・〇
神饌所	六八・五九 二〇・〇
廻廊	六六・〇 二〇・〇
税所神社	九・三二 二・八
門守神社	四・〇五 一・二
手水舎	八・九 二・七
神符授与所	一一・八 三五・〇
社務所	五五・〇 一七一・〇
第一貴賓館	一四八・一七 四四・九
第二貴賓館	二〇二・〇 六一・二
参集所	二〇〇・〇 六〇・〇
神楽殿	一二七・七六 三八・五
同 拝殿	一一二・九六 三四・〇
同 神饌所	一三・七 四・一
同 控所	一五七・四 四七・〇

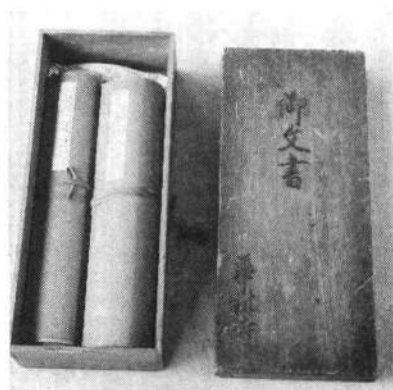
五宝物

参拝者休憩所	約一六一・七	平方呎	四九・〇	坪
参拝者用便所	八四・一五	〃	二五・五	〃
その他	一一〇・〇	〃	三六・〇	〃

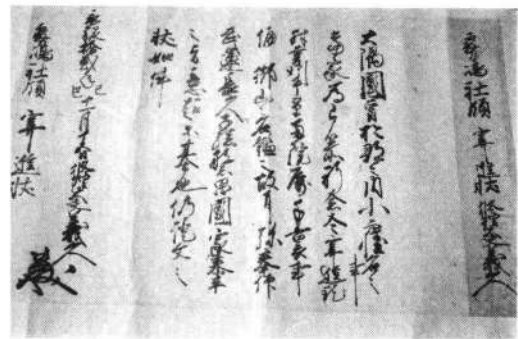
たびたびの火災で失ってしまったが、現存する主なものは次のとおりである。

一 九面（第四編第七章文化財参照）

二 古文書 二卷（島津貴久・義久・義弘の願文寄進状）



霧島神宮宝物（巻物）



三 甲冑 四領（島津義弘奉納・朝鮮征伐凱旋の時に  
寄進したもの）

なお、三池光世作、島津義弘奉納・二尺二寸（約六六  
釐）一振りと長船長光作、島津義弘奉納・二尺九寸五分  
（約九〇釐）の太刀一振りがあったが、いずれも終戦  
後、米軍により没収された。

## 六 参 道

霧島神宮は、旧藩時代別当寺を有し、霧島山一円を境  
内として、西方田口から約四詰の社道を通し、霧島川を  
渡って亀石坂を登り、社頭は壮麗威厳を極めたが、慶応  
二年（一八六六）廃仏の折、別当寺の廃寺とともに建造  
物は破壊され、付近の社有地は官有・私有地となった。  
その後、明治二十年（一八八七）、洪水のため高千穂橋  
が流失、これまでの社道は、通行不能になった。

明治二十九年（一八九六）、都城への県道が開通した  
際、社の約九〇〇坪下方、東多羅に至る社道ができた  
が、社殿の前面近く、下には旅館、農家など十数戸が雑  
然として点在していた。当時は由緒ある神宮の境内にこ  
のような、風致尊厳を損なう風景は恐れ多いとして、内  
務省、神社協会の改修計画により、昭和二年（一九二七）  
四月、境内の民屋の整理、境内の整備をはじめ、境外の  
大参道工事に着手した。その他、社務所・社宅・斎田の  
設置、猿田彦屋敷跡の整備、神宮境内外の水道改修工事  
などを含めて、昭和五年十一月に参道工事が完了した。

境外大参道は、県道戸崎橋から神宮に至る一〇七一メートルで、幅三六メートル、中央九メートル、左右七メートルの緑地帯には、松並木を造成、人道・車道・牛馬道の三つに分けられていた。また、境内正参道は、幅一二・六メートル、その両側一二・六メートルの狛犬敷を設け、延長約一四四メートル、社務所前の幅三六メートルの広場へと通じている。なお、大参道の中央幅九メートルの道は昭和三十三年（一九五八）県道に編入、舗装された。

## 七 霧島神宮の祭典

大祭 御田植祭 旧暦二月四日  
同 例 祭 九月十九日  
同 新嘗祭 十一月二十三日  
その他の主な祭典

散<sup>ちり</sup><sub>ちり</sub>糲<sup>まき</sup><sub>まき</sub> 旧暦一月一日

諸社大祭 四月三日

斎田御田植祭 六月十日

献灯祭 八月五日

天孫降臨記念祭御神火祭 十一月十日

猿田彦命巡行祭

年四回

月次祭 毎月十九日  
朔日祭 毎月一日

### 御田植祭

天孫降臨の時、稲穂を投げ給うたところ霧が晴れたという故事から、霧島神宮の重大行事である。（第四編第七章 県指定無形民俗文化財参照）

照

散<sup>ちり</sup>糲<sup>まき</sup>祭（宇知米伎） 天孫降臨の故事にちなんで行われる糲まきの行事である。旧暦一月一日の朝、神

前に三枝の神を供え、神官がそれを手にしながら四方に糲をまき散らす神事である。『日向風土記』に散米のことがでていいる。また、この場合に限らないが、今の賽銭は米の代わりに銭を神前に投げたことから、散米銭、すなわち賽銭となったともいわれる。

天孫降臨記念祭 此の祭りは、天孫降臨を記念する祭典祭御神火祭で、県内はもとより遠く福岡県内から

のお参りを含め多数の参列者が集まり、年々盛大に行われている。

祭典は、毎年十一月十日午前十時から本宮で本宮祭が行われ、午後五時から高千穂河原古宮跡の天孫降臨記念祭神籬斎場と高千穂峯で御神火を点じて祭典が行われ

る。夕闇迫る斎場の高く積み上げられた薪に、本宮から運ばれた御神火が宮司の手によって点ぜられる。

この祭りでは、毎年天孫降臨九面太鼓の奉納が行われている。

**高千穂河原天孫降臨記念祭神籬斎場** 高千穂峰の西ろく標高九七〇㍎の瀬多尾越（現在の高千穂河原）は、

第六一代朱雀天皇の天慶三年（九四〇）天台の僧、性空上人が、ここに社殿を設けて霧島神社を再興し別当寺華林寺を建立した。第八七代四条天皇の文暦元年（一二三四）霧島山噴火のため社殿・寺院等が焼失するまでの二九四年間の古宮跡である。

昭和十五年（一九四〇）、皇紀二六〇〇年記念事業として、上段五四㍎×三八㍎・下段五四㍎×一六㍎のこの斎場が建設された。

### 神聖降臨の詩碑

神聖降臨地 しんせいりうりんち 乾坤定位時 けんこんていゐじ  
煌々至靈氣 こうこうしれいき 萬世護皇基 ばんせいごすうき

神宮境内、社務所前広場に右の詩碑がある。これは、徳富蘇峯九〇歳の時の詩で、昭和二十七年八月二十三日タンカー霧島丸進水記念として、中川伊勢次郎氏一族から奉納された。霧島丸は、当時タンカーとしては世界一

を誇っていた船であった。

## 八 霧島神宮摂社・末社

霧島神宮の摂社、末社は次のとおりである。

● 摂社 野上神社 田口野上山鎮座（霧島町内外の諸社参照）

● 末社 鎮守神社 境内鎮座

祭神 天照大神

● 税所神社 境内鎮座

祭神 税所篤如命

● 若宮神社 境内鎮座

祭神 天忍雲根命 水波能売神 市岐島姫神 大名牟遲神

祭神

● 門守神社 二社 境内鎮座

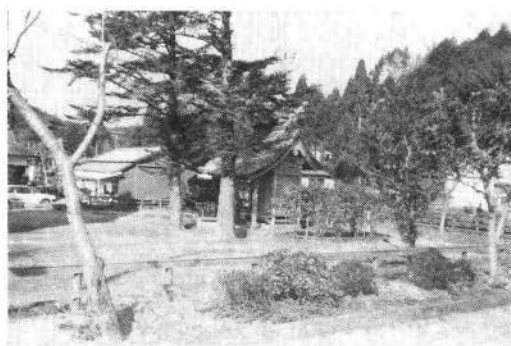
祭神 櫛磐門戸神 豊磐門戸神

● 猿田彦神社 田口塩井境内鎮座

祭神 猿田彦大神

● 山神社 境内鎮座

祭神 大山祇神



猿田彦屋敷跡

猿田彦の名をゆず  
記念するために、  
らあの神の手柄を  
てまいれ。それか  
のだから、あの神  
が帰るのを見送っ  
ていて紹介した  
くれた猿田彦を知  
る旅の道案内をし  
ていた。そして、  
「お前はこんどの  
旅の道案内をして  
くれた猿田彦を知  
っていて紹介した  
のだから、あの神  
が帰るのを見送っ  
てまいれ。それか  
らあの神の手柄を  
記念するために、  
猿田彦の名をゆず

猿田彦屋敷跡 神話によれば、猿田彦命は天孫降臨の  
(田口塩井境内) 時、道案内役をつとめたといわれる神  
であり、また神々に米の作り方を教えた神で、その  
屋敷跡として田口にあり、浄地とされている。高千穂峯  
に降臨された瓊々杵尊は、都を定める土地を求めて海の  
ほうに出て、笠狭の岬にお着きになった。尊は、「ここ  
は、朝日が東から真正面に照り、また夕日もよくさしこ  
んで、じつによい場所だ」といわれ、さっそく御殿を建  
てた。そして、天  
細女命を召して、  
「お前はこんどの  
旅の道案内をして  
くれた猿田彦を知  
っていて紹介した  
のだから、あの神  
が帰るのを見送っ  
てまいれ。それか  
らあの神の手柄を  
記念するために、  
猿田彦の名をゆず

ってもらい、彼と二人分わたしに仕えてくれ」とお命じ  
になった。その後、猿田彦命は伊勢の国の阿坂に住んで  
いたが、ある時漁にでかけ、ヒラフ貝という大きな貝に  
手をはさまれ、そのまま海に引きこまれてしまったとい  
われる。昭和十年ごろ、猿田彦屋敷跡として整備され、  
昭和四十年に霧島神宮の附属社として猿田彦神社が誕生  
した。

メンドンマワリ 霧島神宮で猿田彦命巡行祭が、毎年  
(猿田彦命巡行祭) 春秋各二回、計四回行われている。

霧島神宮では、この祭りを猿田彦命巡行祭と称してい  
るが、地元では、これを「メンドンマワリ」といってい  
る。古くから猿田彦命のお面をかついで、霧島神宮の境  
内を「お祓い」をして巡ったことから、メンドンマワリ  
といったことと思われる。

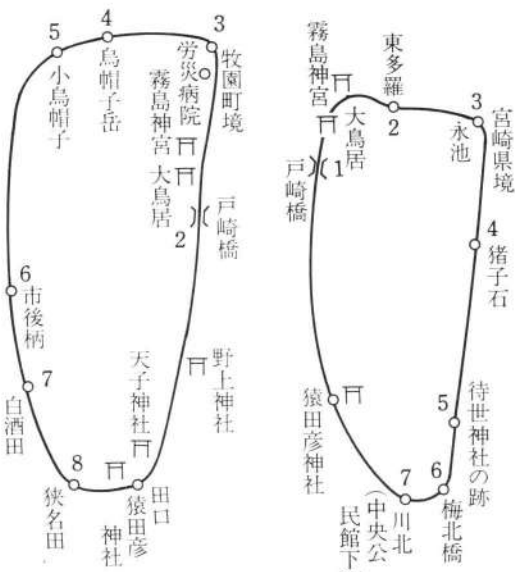
霧島神宮の祭神ニギノミコトが、高天原から霧島の  
高千穂峯にお降りの時、道案内をされた猿田彦命がお祭  
りされている天子神社を出発し、霧島神宮境内を祓い浄  
めて巡る祭りで、霧島神宮の神職一人と田口の橋元さん  
と青年一人か二人が、猿田彦命の直面を棒の先につけ  
て、御屋敷跡の祭場における出発の祭りの後、霧島神宮



猿田彦命巡行祭 祓所 柴立の図

の境内（別図）を「柴立<sup>しばたて</sup>」と称する東巡り七か所、西巡り八か所のお祓い所でお祓いをして回る祭りで、戦前は、田口の青年一五、六人が御神輿<sup>みみこし</sup>をかついで奉仕し盛大に行われていたが、戦後は人手不足のために奉仕する青年も少なく神職二人と青年三人程が奉仕、おみこしによる渡御もなくなり、御神霊を笈<sup>かぶ</sup>に納めて、これを背負って巡り、奉仕している。

また、東巡り、西巡り両祭には、必ず霧島神宮に御着



猿田彦命巡行祭 西巡り  
数字は祓所（柴立）

猿田彦命巡行祭 東巡り  
数字は祓所（柴立）

きになりお祭りの後再び出発、巡路に従って巡行されているが、現在では、猿田彦命御屋敷跡地に猿田彦神社社殿が建立され、お祭りされている。

春秋の巡行祭は、次の日に行われている。

# ● 春の巡行祭

東巡り 旧暦二月四日に行われる霧島神宮御田植祭の七日前の日に行われる。

西巡り 旧暦二月初卯の日に行われる霧島神宮の摂社

野上神社の春祭の三日前の日に行われる。

●秋の巡行祭

東巡り 旧暦九月十九日に行われる霧島神宮古例祭の  
七日前の日に行われる。

西巡り 旧暦十一月初卯の日に行われる野上神社秋祭  
りの三日前の日に行われる。

天孫降臨の際、猿田彦命が道案内をされたことからこ  
のような猿田彦命巡行祭が行われるのである。

## 第二節 霧島町内外の諸社

霧島町内および霧島国立公園内にある主な神社は、次  
のとおりである。

### 野上神社 田口

祭神

あめのみかみ天御中主神・たかみ高皇産靈神・あまの天照大神

・あめのおしほのみこと栲機千々姫命・あめのおしほのみこと天忍穗耳命・たまよひのみこと玉依姫命。霧島神宮の

摂社（本社と末社の中間に位する社格）として定められ  
ている。



野上神社



## 長尾神社

宮崎県北諸県郡

祭神 天彦火瓊々杵尊・木花咲耶姫命・彦

火々出見尊・豊玉姫命・鶴草葺不合尊・玉依姫命・神倭磐余彦尊。戦前まで霧島神宮の摂社であった。

## 霧島峯神社

宮崎県小林市

祭神 長尾神社に同じ。戦前まで霧島神

宮の摂社

## 東霧島神社

宮崎県西諸県郡高原町

祭神 伊弉諾尊・伊弉冊尊・瓊々杵尊・木

花咲耶姫命・彦火々出見尊・豊玉姫命・鶴草葺不合尊。

戦前まで霧島神宮の摂社であった。

霧島六社権現の一つで別当寺は錫太院といった。開山は性空上人。社説によると、村上天皇のころ、性空上人がこの地に來てから、荒廢していた社殿は一新したという。その後、天永三年（一一一二）二月、霧島山噴火の時、社廟は全部焼け、さらに文暦元年（一二三四）の噴火で、美しかった森林も焦土と化したという。文明十八年（一四八六）、島津一代忠昌公が再建、その後、島津義弘のころ、日向伊東家の家臣、池江民部という山法師が來て、この地を横領しようとしたので、島津家から

久留掃部助重辰・赤塚源左衛門直重・宮田肥後守政次などがやって來て民部を倒し、神慮を安んじたという。

また、享保十一年（一七二六）、牧胤昌という者が來て、神社近くの御池の周囲が一里程あるのを見て、山中にこのような池のあることは不思議だと見るうち、にわか雲に覆われ、雨が降りだしたので「竜や臥す 日影は空に見えながら 雨風競う池の景色は」と詠じたという。別当寺錫杖院の別名を東光坊といった。明治の初年ごろまでは二階建ての高樓があり、登山客を泊めていたという。高千穂山頂の天逆鉾はこの神社の所管である。

## 狭野神社

宮崎県西諸県郡高原町

祭神 瓊々杵尊・木花咲耶姫命・彦火々出

見尊・豊玉姫命・鶴草葺不合尊・玉依姫命・神武天皇（神倭磐余彦尊）・吾平津姫命。

霧島六社権現の一つである。別当寺を神徳院といい、開山は慶胤といわれる。伝説によると、神武天皇の幼名を狭野尊といい、ここが御生誕の地（皇子原）といわれる。神武天皇を祭祀してある宮崎市宮崎神宮の別宮であった。この神社も、社殿創建以来、度々の噴火火災にあり、慶長十五年（一六一〇）再び造営された。島津氏は

代々、この神社に対しても敬崇の念があつたが、慶応二年の廃仏の折、別当寺は廃止された。

### 白鳥神社

宮崎県えびの市

祭神 日本武尊。時に六社権現のなかに数えられることもある。白鳥火山の東、六観音池の近くにある。

### 永野田の七社神社

祭神 八十狂津日命・大直日命・天表春命・天伊佐市主命・天背男

命・経津主命。

神社勧請の年月は不明である。止上神書によると勧請の初祖は清水の清水将監であるといひ、その子孫二十余代、宮司として祭りをつかさどってきた。神殿浜床の下に立帽子の男神一座および女体一座がお祭りしてあるという。本社再興の棟札に次のような記録が残っている。

(一五五八)

右者弘治四年戊午卯月吉日棟札有之、島津讃岐守忠相京

御奔走、檀那大宮司坂元彦右衛門尉、同女布一同子与老左衛門尉並女大施主布一。大檀那曾於郡地頭財部筑前守平盛住・鍛治園田主税助・大工長瀬助左衛門尉・小工高橋善左衛門尉・料足三貫文寄進川越主計丞・坂元十郎左衛門尉・同助衛門尉・同彦八郎・同彦五郎・同助兵衛尉・森彦左衛門・森彦八・同助十郎

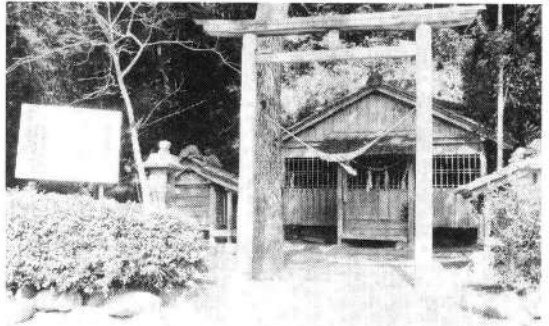


永野田の七社神社

このような記名があり、さらに「作料米四石五斗料四十五貫文成就畢、筆者霧島山多門坊兼忠」ともある。

なお、七社鎮座の箇所は次のとおりであった。

永野田の七社神社（永野田） 入水の七社神社（入水）  
飯富神社（大窪） 場集田の七社神社（川北・向田） 尾谷の七社神社（川北・尾谷） 社が迫の七社神社（尾谷社が迫） 名の迫の七社神社（国分市姫城）

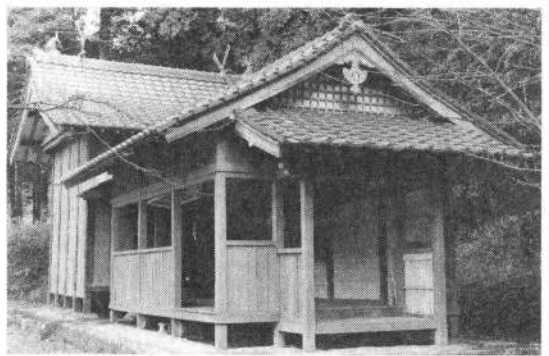


場集田の七社神社

名の迫の七社神社は明治十二年（一八七九）、永野田の七社神社に合祀、尾谷の七社神社と社が迫の七社神社は同四十四年、場集田の七社神社に合祀された。永野田神社の祭典は、二月十五日、六月二十九日、十二月十五日である。明治四十一年、内務省訓令で村社は村長が供進使を務めるよう定められたが、もちろん現在そのような制度はない。戦前まで霧島神宮の境外末社であった。

### 入水の七社神社

祭神 十一座、また、七社大明神とい、鹿島大明神・鎌足大臣を祭祀する。境内の老神社には祭神のご両親、同じく神明宮には天照大神を祭っている。「隅州神社考」「神祇全書」に



入水の七社神社

は、天正年間（天正元年一五七三）、久木元藤左衛門建立とあり、「正上神社神書」によると、天文二十一年（一五五二）本社再興の棟札のことが記載されている。くわしいことは不明である。昭和三年の御大典を記念して、無格

### 七社神社昇格願

本村重久の入水に鎮座の無格社七社神社は、七社大明神と申し奉り、鹿島大明神鎌足大臣を祭り奉れる社にして、その建立の年月日不詳といえども、本村郷社止上神社の蔵する神書に天正の歳とあり、古くより崇拝せられたる神社にして氏子の崇敬深く厚く、基本金の造成に、社殿の改修

に、社庭の美化に、或は参道の改修など最善をつくし居る次第にて、社地は位置高くして人道より六十の石階段を登りて漸く鳥居に達す。昼なお暗き老樹の中に社殿あり自ら尊厳さを加う。

この度の御大典を期し、昇格願の儀につき、協議致候処、何れも賛成仕り、特に村会及び重久共有地所有者総会は、別紙添書の如く申出候に就いては将来益々敬神崇祖の美風を維持致度候間、村社に御昇格の儀御許可相成度別紙調査書相添此段願ひ奉り候也。

昭和三年十月三十日 社司代理 浅谷市之進

村 長 塩川弥九郎

## 天子神社

田口辻

祭神 天楼津大来目命・天忍日命・蛭子命

・倉稻魂命・猿田彦命・木花咲耶姫命・瓊々杵尊。

これらのご祭神は天孫と、天孫降臨の時の随行の神々である。『古事記』天孫降臨の条に、「天忍日命、天楼津大来目命二人、天の石鞆いわたづみを取負い頭稚之大刀かみわかちのたちぎを取佩き、天の波土弓を取り持ち、天の真鹿矢を手挟み、御前に立ち奉り云々」とある。また『姓氏録』に「高皇産靈神たかみけうさんりやうじん五世天押命云々……天孫彦火瓊々杵尊神あもりましにき鶴之隆也、天押日命・大来目命・御前に立ち、日向高千穗峯に降り云々」



天子神社

とある。この神々をここに勧請した年暦は不明である。

## 稲葉神社

天子神社に合祀

祭神 木花咲耶姫命・倉稻魂命・猿田彦

命。

四条天皇の嘉祿年中（約七五五年前）、霧島神社の社司橋元某に神託があつて、霧島神社の神田をここに定め、当神社を建立し、毎年この田の新穀を新嘗祭にいなめさいの神供

としたと伝えられている。霧島神宮の二月の祈念祭では、この田の稲穂を添えて田の神を祭ったということである。このように、古い伝説と歴史をもつ神社であったが、維持が困難のため、現在では天子神社に合祀され、その後は民有地となっている。

### 飯富神社

大窪

霧島神宮の末社であったが、勧請の年月不明。一三〇余年前、次のような記録がある。

#### 奉撰録飯富社大明神社記

哀愍衆生者、大願主帝釈天皇、我等今敬礼

当社は饗峯に有る霧島宮の摂社にして、本宮より午未うまひを経て二里を去る大久保村所に在り。祭神は七座にして天日神命・天香山命・天櫛玉命・天弁良雲命・天破法命・稲飯命・岐志弥命などなり。恭しく原に伏し古を惟んみるに天孫天津彦火瓊々杵尊、初めて高千穂峯に天降り給ひ賊を討ち国を弘め給ひし時、列に撫し供奉りし御神なり。嗚呼久しいかな。遠く神書に曰く、天祖瓊々杵尊降跡以来一百七十九万二千五百廿余年、往時の大縁礼宣命など、文暦元年の神火にて焼失、是より以前詳かならず。御当家十二代島津陸奥守忠昌公、仁に帰し穂に達し、神を敬い仏を信じ、庵を興し壊を治められること他なし。故に文明十六年本宮諸末社を再興遊ばさる。其の後、勝久公国主たるや忠臣を



飯富神社

退け国は乱れ、まさに滅びんとす。因って寺社未だ繁栄せず。これにより三州の諸士貴久公を仰ぎ悉く臣と成る。時に本田形部少輔使者となり曾於郡一所霧島の神領となす。是永録八年二月五日なり。同十九年正月廿五日、地頭、三原遠江使者を以って、大久保村高百廿九石八斗八升三合六夕御寄進さる。義久公、豊後大友退治の御願感あり大友大軍滅亡す。天正四年八月彼岸、飯富大明神御祭始め給う。義久公義弘公御嵩敬昌なり。時すでに、澆季に及び本宮社領八百七名、当社已に本社に準じ修覆祭祀之有れども、然

る後、元和四年戊午八月社領勘落に及び五百石成行、以来漸く衰微し郷内氏子の助勢を以て修甫祭典相勤む。本宮江由來委故令省略。元文三年申八月、寺社奉行所より霧島山諸末社残無く本地垂迹の由來祭数並に備物社主申し出ず可き仰せ渡せらる。右公門に達し寛保元年十月寺社座取次伊東七兵衛御領内神社仏閣御改巡見を為し、諸末社指図並由記大概右の通り相認め上納致さる。然るに当社棟札旧記由緒なく御本社由來記並貴久公義弘公家久公の御感状を以て選録す。牛誠神威仏徳相和し応物の大権無く有終尽く翼に伏す。大檀那繼豊公室寿延び御子孫悠久にして国衛安全・郷内男女息災延命白穀畦に充ち永榮禱に至る。慎みて怠る勿れ。

維持寛保元年辛酉十一月十五日本社主

永田猶右衛門重利

税所弥三右衛門篤則

これによると、天正四年（一五七六）に飯富神社の祭りが始まったとある。また、領内寺社巡見の折、当社の由來がなかったため、霧島神宮の由來をそのまま利用して認められたとある。

### 妙見神社

牧神

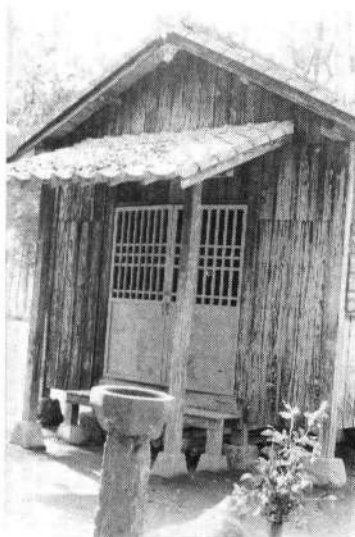
祭神

天御中主命。妙見大明神と言う。春

山野に牧の守護神、禿倉の神として鎮座していたが、元

禄十六年（一七〇三）東山天皇の御代に、島田民部左衛門尉が大守光久公に願って今の地に遷宮し祭ったと伝えられている。この遷宮については、第四編第七章第二節史跡のところにくわしく記してある。

妙見神社境内で行われる「牧神相撲」は有名であるが、大正時代から始まり、戦争の激しくなった終戦までの二年間ぐらいと、戦後の混乱期二年ぐらいを除いて続けられている。九月二十三日（秋分の日）に行われるが、戦前はおとなの相撲として「大窪相撲」と「横岳相撲」の三か所があり、近隣村からも若者や見物客が押し寄せにぎやかだったという。大窪と横岳の相撲は、戦争



妙見神社

で若者もいなくなり非常事態のもとで無くなってしまったが、「牧神相撲」だけはいち早く復活し、子ども相撲が主になっている。当日は、地域の婦人会が煮しめや握り飯などを見物人に振る舞い、酒も飲みほうだいのにぎやかなものである。若き日を懐かしんで、遠方から訪れる高齢者も多く、霧島町内の大きな行事の一つとなっている。